



北海道立江差病院 新院長に就任して ～地域センター病院として、その抱負と課題～

松山医師会 理事
北海道立江差病院 院長
寺井 紀雄

平成25年4月より北海道立江差病院院長を拝命させていただくこととなりました寺井紀雄でございます。新任のご挨拶と抱負および今後の課題について述べさせていただきます。

北海道立江差病院は昭和23年8月に開設された65年の歴史をもつ病院で、南檜山地域5町（厚沢部・江差・乙部・上の国・奥尻）の医療の中核として、唯一の地域センター病院、二次救急病院です。当病院は離島を含む5つの町はもとより、圏域を越えて、北はせたな町大成地区・旧熊石町・南は松前町まで渡島半島日本海側一帯の広域な診療圏の中で急性期一次および二次医療を担っております。

診療は、内科（消化器・循環器・呼吸器・神経）・外科・整形外科・産婦人科・小児科・泌尿器科・耳鼻咽喉科、眼科・皮膚科・麻酔科・リハビリテーション科などに加え中核病院でもあまり標榜のない精神科を標榜しており、管内唯一の二次救急病院として、主に札幌医科大学から応援をいただきながら常勤医12名で24時間、365日対応する体制を敷いています。当院は、平成10年7月に現在地に移転しましたが、この時を機会に古い病院のシステムから脱却し、スタッフの体制や医療機器などの更新をはかり、現代の新しい医療を実践できうる病院へと変貌しました。日本医療機能評価機構の認定は平成12年に道南の官公立病院では2番目に取得しており、平成22年には最新のVer6病院機能評価の認定も取得しております。

私は江差病院に小児科医として赴任して10数年になり、現場スタッフとともに仕事をし、スタッフ目線で病院の状況や患者さまの様子をみてきました。また当地域における医療状況も自分なりにある程度把握し理解できるようになったつもりです。平成19年より当院で分娩が休止となり住民が困っていること、ここ10年間で呼吸器内科、産婦人科、眼科、耳鼻科、麻酔科などの常勤医が不在となり出張医の先生に依存しなければならなくなってしまったこと、以後慢性的な医師・看護師・コメディカルスタッフの不足、勤務医の過労問題、不採算地区における不採算医療（小児・周産期・救急など）、国の不十分かつ不合理な医療政策による地域医療の危機が当院にも押し寄せてまいりました。また当地域においても

ほかの地方同様過疎化・高齢化が進み小児人口は年々減少しております。このような状況下のもとで今回私は当地域センター病院院長に任命されました。今までは小児科医の立場でしか物事を考えていませんでしたが、今後は総合病院院長としての立場で考えなければならないことを大学学長、大学教授、各町々の町長や病院長、北海道庁関係者の方々に挨拶に回ることで実感し、今さらながら責任の重大さを改めて痛感いたしました。しかし当院医局の先生方およびスタッフの方々の応援と励ましや全面的に支援して下さいという松山医師会諸先生方の暖かいお言葉に勇気づけられ、無事業務を遂行させていただいております。ご支援して下さい皆さまのご期待に応えるためにも地域住民のより良い医療を実現するために最大限努力しできる限り尽力する所存です。

行政面では現在休止になっている分娩の再開問題、ますます深刻化している病院スタッフ不足問題や慢性的な赤字に陥っている病院経営改善問題などを含めた大問題が山積しておりますが、実現可能なものから一つずつ問題点を地道に解決して行こうと考えております。診療面では小児科医としての観点で考え実践してまいりました医療に加えて、これからはさらに顕在化している高齢化社会にも目を向け、総合病院院長としての立場で当地域全体の医療問題を包括的に考え、ほかの医療機関ともしっかり連携をとりながら対策を練っていかねばなりません。私は診療の際いつも考えていることは、私の治療を受けて本当に良かったと思っていただける医療をすることです。これからは小児科の患者さんだけではなくこの江差病院に治療を受けに来るすべての患者さんに本当に良かったと思っていただける医療を提供することが私のスローガンになります。

今後私は地元の方々との対話を増やし、意見をよく聞いて住民の方々が何を望み期待しているかをしっかりと把握したうえで、道南・南檜山の地域の住民のために、地域医療サービスの充実と技術の向上に精励し、地域の基幹病院としてより地域に根ざした運営を目指しながら一層信頼される病院としての責務を果たし、住民とともに歩んでいきたいと考えております。